資料シリーズ　No.138
２００３年９月

小学生の職業意識とキャリアガイダンス

（概　　要）

日本労働研究機構

執筆担当者（執筆順）

氏　名	所　属（2003年9月現在）	執筆分担
下村英雄（しもむらひでお）	日本労働研究機構副主任研究員	第1章、第2章、第8章、第9章
高綱睦美（たかつなむつみ）	愛知教育大学非常勤講師	第3章、第6章
吉中淳（よしなかあつし）	南九州大学講師	第4章
富永美佐子（とみながみさこ）	東北大学大学院教育学研究科博士課程後期	第5章
若松養亮（わかまつようすけ）	滋賀大学教育学部助教授	第7章
石井徹（いしいとおる）	日本労働研究機構主任研究員	第10章

職業調査研究小委員会

菊池武剋	東北大学大学院教育学研究科教授
若松養亮	滋賀大学教育学部助教授
吉中淳	南九州大学園芸学部講師
高綱睦美	愛知教育大学非常勤講師
富永美佐子	東北大学大学院教育学研究科博士課程後期
吉田修	日本労働研究機構統括研究員
石井徹	日本労働研究機構主任研究員
下村英雄	日本労働研究機構副主任研究員
田中里枝	日本労働研究機構研究員（2002年3月まで）

問題・背景・方法

1．職業情報開発と新たな課題

若年者の進路選択と職業情報の整備　若年者の進路選択は大きく変化している。従来は、学校から職業へスムーズに移行させるシステムが機能していた。教師の指示どおり、就職活動のスケジュールに乗っていれば、自然と就職することができた。しかし、そうしたシステムは崩れつつある。今後、若年者はこれまで以上に自分の責任で進路を選ばなければならない。自分で情報収集を行い、自分で情報を評価し、自分で決定を下さなければならない。したがって、その判断の材料となる「職業情報」の重要性はますます高まると思われる（日本労働研究機構，2001）。

実際、若年者の進路選択を援助する具体的な施策として「職業情報」の整備が急ピッチで進められている。まず、ハード面では、東京・六本木に若年者に対する一大職業情報センターとして「学生職業総合支援センター」が開館した。東京・渋谷では「ヤングハローワーク」に併設された「しぶや・しごと館」で、さまざまな職業の内容を紹介するビデオが閲覧可能である。また、関西には職場体験・ビデオその他の職業情報センターとして「私のしごと館」が建設された。

ハード面での拡充だけではなくソフト面でも整備は進められている。最近の成果としては、日本労働研究機構から公開された「職業ハンドブック OHBY（Occupational Handbook for Youth）」がある（日本労働研究機構，2002）。職業ハンドブック OHBY は中学・高校生が自分で職業選び・自己発見ができるガイダンスシステムであり、「現代の主要な430職業について分かりやすく詳しい解説」「豊富な画像やイラストから職業の世界をやさしく学べる」「いろいろな探索メニューから、興味・関心のある職業を調べられる」「簡単なテストで、自分の興味・能力の特性を理解できる」といった特徴がある。膨大な職業情報を様々な側面から検索し、文字や画像・イラストによって理解できるマルチメディアによる総合的なキャリアガイダンスシステムとなっている。

このように現実の具体的な施策として若年者向けの職業情報の整備が進むなか、職業情報開発研究では検討すべき新たな課題が様々な面で浮かび上がってきている。これは大きく「職業知識」の問題と、「職業認知」の問題といった２つの側面から整理することができるであろう。

若年者の職業知識の問題　第一に、若年者の職業知識の問題とは、若年者は職業についてどのようなことを知っているのかという問題である。これは若年者の職業発達や進路選択を支援する施策を進める上で重要な意味をもつ。例えば、中高生向けの職業情報を開発するにあたっては、開発のための予算、開発に要する人員、開発までの時間など、いくつもの制約条件がある。そのため、取り上げるべき職業数を限定するための、何らかの選択基準が必要となる。例えば、中高生が漠然と

しか知らない職業を取り上げ、さらに詳しい職業情報を提供するのが開発目的であれば、取り上げる職業名は中高生が何らかの形でイメージできる職業ということになるであろう。一方、中高生にとって身近ではないために十分な知識がない職業だけを取り上げて紹介するという開発目的もあるかもしれない。その場合には、中高生がまったく知らない職業だけを取り上げることになるであろう。いずれにせよ、中高生向けの職業情報を開発する際には、中高生が必要とする職業情報を大まかに捉え、それにあった職業情報を提供する必要がある。

このようにユーザーの特性を考慮した職業情報の提示を行う理由は、ニーズにあった職業情報の提示がもっともガイダンス効果が高く、開発目的を最も効率的に達成できるからである。つまり、「職業情報が職業理解や職業選択に役立つには、まず利用対象の職業に対する認知に基づき、彼らに適した情報の内容や項目などの基準（ガイドライン）を設定すること、そして利用者の特性や要望に基づいて情報を提供できるシステムを用意することが重要である（石井, 2001）」。その意味で、職業情報の開発を効果的に行うためには、ユーザーは事前にどのような職業知識を持っているのか、また、どのような職業に関心を持っているのかといった検討が必要となる。

若年者の職業認知の問題　第二に、若年者の職業認知の問題とは、若年者は職業をどのように知るのかという問題である。職業情報開発にあたっては、その情報内容もさることながら情報の提示方法が重要となる。これは、情報へのアクセスのしやすさ、または情報の探索のしやすさによって、若年者が参照可能な情報が影響を受けるからである。例えば、従来から定期的に内容が更新されてきた「職業ハンドブック」は、平成9年版からCD-ROM形式によっても配布されている。CD-ROMで配布し、コンピュータ上で活用することによって、様々な検索キーを用いて興味関心のある職業を適切に迅速に選択することが可能となっている。職業情報の内容だけでなく、視認性、検索の容易さ、取り扱いの簡便さなど、アクセスの方法またはインターフェイスといったことを重視した結果である。そして、ユーザーによって使いやすい職業情報の提示といった問題を考えるにつれて、「ユーザーはどのようにすれば職業情報をもっと使いやすくなるのか」といった問題が浮上してきた。このように、若年者の職業認知の問題は、職業情報の提示方法が多様になるにつれて改めて注目されるようになった問題であるとも言える。

若年者の職業知識と職業認知の関連　この職業知識と職業認知の問題は互いに関連している。若年者の職業認知を考えるにあたって、客観的な職業世界と主観的な職業世界があり、その両者は何らかのバイアスによって偏っていることが考えられるからである。仮に若年者が客観的な職業世界をそのまま知識として蓄えていると想定できるとすれば、単純に、若年者は職業世界についてどの程度知識を持っているのかを量的に把握すれば良いということになろう。しかし、宮崎（1973）が既に指摘していたように、個人が職業世界に関する知識を取り入れる際には、「メディアによる認

知バイアス」「個人内の情報選択の認知バイアス」など、いくつかのバイアスが想定される。つまり、何らかのフィルターがかかって個人内に職業知識は蓄積されていると考えられる。したがって、若年者は何らかの意味で職業世界を主観的に捉え直しているのであり、単純に、若年者の職業知識量を問題にするのでは不十分である。

以上のように考えることで、客観的な職業世界はどのようにして個人内の職業知識として定着しているのかといった問題設定が可能になる。つまり、職業認知を論点とするということは、客観的な職業世界を反映する職業情報と、その職業情報を取り入れる個人の職業認知の２つの側面に分けて考え、その両者がそれぞれ何からの面で偏向しているために、結果的に偏った職業知識が個人内に蓄積されていると考えることである。この問題は、従来、認知心理学や人間工学などの領域で取り扱われている「マン－マシンインターフェイス」の問題とも密接に関連している。職業情報に関する研究は、現在、その内容のみならず、どのような対象に、どのように提示するのかといった問題を、対象者の認知特性との関連で考える段階にきている。

今回、我々の研究チームが暗黙に共有している課題は、上記の職業知識と職業認知の問題である。まとめれば、職業情報の整備を進め、コンピュータなど新たな媒体による提供を心がけるにつれて、ユーザーである対象者の認知特性と情報媒体特性の相互作用について、次々に問題や課題が浮かび上がってきたということになるであろう。

２．中高生の職業認知調査の概要

以上のような問題意識から、本研究に先立って中高生の職業認知について検討を行った（日本労働研究機構，2001：資料シリーズ No.112「中学生・高校生の職業認知」)。具体的には、中高生4,399名に424職業名のリストを提示して、「イメージできない」「知りたい」「やってみたい」の３つの側面について「はい－いいえ」で評定を求める調査を実施した。①「イメージできない」「知りたい」「やってみたい」による職業ランキング、②職業認知の性別・学校段階別の違い、③「イメージできない」「知りたい」「やってみたい」の３指標間の関連、④中高生の職業認知の構造（基本的な判断軸）の４つの側面について分析を行い、それぞれ以下のような結果が得られた。

職業ランキングによる結果　中高生が「イメージできる」職業には、「ペットショップ店員」「レジ係」「コンビニ店長」「ゲームセンター店員」「美容師」「ビデオレンタル店店員」など、身近な社会に存在する職業が多い。それに対して、中高生が「知りたい」「やってみたい」職業は、むしろマスメディアを通じて目にする職業である。特に、マスコミ・芸能関係の職業、ファッション関連の職業、動物に関わる職業、コンピュータ関連の職業が多く挙げられていた。また、「知りたい」「やってみたい」職業は、従来から一貫して子どもたちの憧れである職業と、時代とともにマスコ

ミの影響などによって注目され、取り上げられるようになった職業の2種類に大別され、特に年齢が上昇するにつれて、興味・関心が後者のようなマスコミを通じて目にする機会が多い職業へと移行していく可能性が示された。

職業認知の性別・学校段階別の違い　中学生・高校生ともに「イメージできる」「知りたい」「やってみたい」職業のどの指標でも男女差がみられた。男子の方がよく「イメージできる」職業は、「めっき工」「金属プレス工」「溶接工」「合板工」「NC研削盤工」などの技術系の職業が多く、女子の方がよく「イメージできる」職業は、「インテリアコーディネーター」「着付師」「メーキャップアーティスト」「カラーコーディネーター」などのファッション関連の職業が多い。また、男子の方が「知りたい」「やってみたい」職業でも、基本的には同様の傾向がみられるが、特徴として以下の点が挙げられる。すなわち、男子は、乗り物に関わる技術者や運転手、建築関係、スポーツ選手、工員など男子の就業者数が多く、典型的に男子が好むような職業を「知りたい」「やってみたい」と考え、女子は「保育士」「幼稚園教員」「看護婦」「スチュワーデス」「フラワーショップ店員」など典型的に女性が好むような職業を「知りたい」「やってみたい」と考えていた。

「イメージできない」「知りたい」「やってみたい」の3指標間の関連　ある職業が「イメージできない」程度と「知りたい」と思う程度、および「知りたい」と思う程度と「やってみたい」と思う程度にはそれぞれ深い関連がみられるが、後者の方が関連は強い。また、「イメージできない－イメージできる」「知りたい－知りたくない」「やってみたい－やってみたくない」の3指標を組み合わせて8類型を設定し、それぞれの類型を代表する職業を抽出して検討した。その結果、ある職業をイメージできる人が特に「知りたい」と思う職業は、「やってみたい」と思う割合も高い職業であった。すなわち、イメージできる職業の中から知りたい、やってみたいという感情が現れるのがより一般的なプロセスであった。それに対して、ある職業をイメージできないにもかかわらず「知りたい」と思う職業は、必ずしも自分が選ぶことを考えてというよりは、よく分からないが華やかな、あるいは先端のイメージがあるから興味本位で知りたいと思うようなプロセスがあることが推測された。大まかに言えば、「イメージできる職業」を「知りたい」と思うことは「やってみたい」につながるが、「知りたい」と思う職業でもイメージできないものは「やってみたい」につながりにくいことが明らかになった。

中高生の職業認知の構造　中高生の段階で既に特定の産業ごとに一定の職業群の認知を確立しており、そうした漠然とした職業群の認知をもとにイメージのつく職業とつかない職業の弁別を行っていた。その際、まず、その内容をイメージできる職業か否かが職業群を分ける大きな基準となっており、イメージできる職業はその内容から知りたいと思ったり、やってみたいと思ったりする職業がみられるが、イメージできない職業は、①職業名の意味が分からない職業、②何をするのか分

からない職業、③具体的にどういう仕事なのか分からない職業に大別されるようであった。また、茫漠とした職業世界を認知するにあたって、何らかの形で認知的負荷を軽減する形で、自分にとって明示的な判断基準となりうる「性別」「成績」などによって職業の世界を弁別的に認知していた。中高生の職業認知の問題は必ずしも「知識量が不十分」な点にあるのではなく、むしろ「偏った知識」である点にあると考えられた。

3．中高生の職業認知調査から浮かび上がった新たな課題

中高生を対象とした調査結果によって、中高生の職業認知について一定の結果が得られた。しかし、いくつかの疑問点や新たな検討点も浮かび上がった。

職業グループの認知の形成過程　第一に、中高生が職業を認知する際には、個別の職業を認知しているのではなく、何らかの職業グループを認知していると考えられる。例えば、上記の調査結果概要でも「マスコミ・芸能関係の職業」「ファッション関連の職業」「動物に関わる職業」「コンピュータ関連の職業」「技術系の職業」といった職業のグループ分けが見出された。このような結果から、中高生の職業認知が「直接的な経験」と「マスコミの影響」と「将来に対する憧れ」の3つのソースからの影響が相互に絡み合って形作られていることが推測される。しかし、この3者の相互の関係はどのようなものであろうか。どれか1つが核となって、他の2つのソースの影響を受けているのであろうか。それとも、3つのソースがそれぞれ独立に影響を及ぼしあっているのであろうか。この点に関しては、どの段階でこのような職業グループの認知が形成されているのかが素朴な疑問として浮かび上がる。

職業認知と性別の関連づけのプロセス　第二に、中高生の職業認知調査結果からは、これらの職業グループの背景にいくつかの特徴または性質があることがうかがえた。例えば、前回の調査では、一貫して性別による結果の違いが示された。①中学男子がイメージできる職業ランキングでは、「プロサッカー選手」「パイロット」など男子に人気のある職業がランクインし、中学女子では「美容師」「声優」「保育士」「スチュワーデス・スチュワード」など、女子が憧れる職業群がランクインした。②知りたいと思う職業ランキングでは、男子のトップ3は「ゲームクリエーター」「探検家」「宇宙飛行士」であるが、女子のトップ3は「洋菓子職人」「美容師」「スタイリスト」であった。③やってみたいと思う職業ランキングでは、男子のトップ3は「ゲームクリエーター」「コンピュータ設計技術者」「探検家」であり、女子のトップ3は「美容師」「洋菓子職人」「ファッション商品販売員」であった。④イメージできる職業ランキングの上位に挙げられた職業は男女間で異なるのに対して、下位の職業名にはあまり差がみられないという性質が示された。⑤ひとたび「男性的」「女性的」な職業とイメージされた後は、その職業に対して知りたいとは思わなくなる

と解釈できる結果が示された。⑥ある職業をイメージできるとする割合は、中学・高校を通じて、女子の方が一貫して多い。⑦主成分分析の結果でも、「スタイリスト」「ファッション商品販売員」「メーキャップアーティスト」などの職業名から構成される主成分、「幼稚園教員」「児童指導員」「ベビーシッター」などの職業名から構成される主成分、「看護婦・看護士」「スチュワーデス・スチュワード」「美容師」などの職業名から構成される主成分など、女子が知りたいと回答した職業名群と解釈される主成分が観察された。これらの結果から職業認知と性別の関係はかなり根強いことが示される。この点については、なぜ職業認知と性別にはここまで強い関連がみられるのかが問題となる。そして、この問題を解く鍵として、どの段階で職業認知は性別と関連づけられるのかといったことが問題となる。

職業認知と学業成績の関連づけのプロセス　第三に、性別との関連ほど明確ではないながらも、進学志望か就職志望かと関連が深い職業名群があることも、ある程度示された。そして、その背景には学業成績と職業認知の関連がうかがえた。例えば、職業認知の構造分析では、「裁判官」「弁護士」「国連職員」「医学研究者」がひとかたまりのグループとして現れており、この職業グループを好むのは、主要5教科を得意と考える割合の高い者であった。この点についても、なぜ、ある職業とある特徴とが結びつくのか、その結びつきの理由・原因といったものが関心の焦点となる。とくに、職業認知と学業成績の関連は、その後の職業的威信の認知とも深く関連してくることが予想される。職業興味や職業適性などの理解の核となっているのも、この学業成績の自己認知である可能性も高い。改めて、学業成績との関連が問い直される必要がある。

職業認知の発達的な変化　第四に、職業認知には年齢に対応した順序性、または発達的な変化が観察された。例えば、ほとんどの職業について中学生よりも高校生の方がイメージできる一方で、知りたいまたはやってみたい職業はどちらかと言えば中学生の方が高校生よりも多い。その背景には、ステレオタイプ的な職業興味を脱して「現実性」を増すという形で、または「夢」を失うという形で知りたい、やってみたいという職業が減少しているといった可能性が推測される。また、イメージできてかつ知りたい職業の内容を検討した場合でも、中学生に比べて高校生は趣味的・直感的な興味によって職業名を挙げる傾向が少ない。そもそも高校生は中学生に比べて、ある職業について、イメージできないにもかかわらず知りたいと回答する割合が低い。これらの結果の背景には、ある漠然とした夢、憧れのようなものが次第に現実的な選好へと収斂していく過程を想定できるだろう。その収斂の過程で、特定の職業に対する認知が様々な回答傾向として現れていると考えられる。実際、主成分分析の結果からは、職業認知においては、ある職業をイメージできるか否かの判断が先行し、その後、性別や学業成績などある程度客観的・絶対的な判断基準で職業は弁別的に認知されていくといった可能性も示されていた。このように、従来は職業知識の発達過程といった脈

略で論じられていた問題は、職業認知の発達過程との関連で改めて考える必要がある。すなわち、職業知識の増減が単純に論じられるのではなく、どのように認知されている職業がどのように変化していくのかを詳細に検討する必要がある。

その他の問題　その他の問題としては、まず第一に、中高生の職業認知の情報源の問題が残された。石井（2001）が述べるように、「個人的な職業の認知は、個別の情報の入手経路、特に家族や親類の職業（家業）やその友人、人脈などの人的な経路が影響を与えることが考えられる」。若年者は職業に関する情報を、実際の職業を見聞きした経験、マスメディアによる情報、身の回りの人からの話など多様なソースから得ていることは間違いないであろう。しかし、その影響の与え方には様々なものがあるのではないだろうか。どんな職業についての情報がどのような情報源から得られるのであろうか。世間に流通している通俗的な職業情報とその情報源が、中高生の職業認知にどのような影響を与えるのかについては、課題が残されたと言える。第二に、中高生の個人属性と職業認知の問題が残された。若年者の職業認知は、若年者の個人的な属性とどのように関連しているのであろうか。例えば、好きな科目と好む職業の関連はどうなっているのか。将来、どのように働きたいと考えている若年者はどんな職業を好むであろうか。キャリアガイダンスの主だった手法が個人を対象とした援助である理由は、個々の実情にそった援助を提供できる点にある。したがって、職業認知と個人属性の関連を改めて取りあげる必要がある。

以上の論考から、前回実施した中高生の職業認知調査の結果から新たに浮かび上がった課題を以下のようにまとめることができる。

①職業グループの認知の形成過程

②職業認知と性差との関連づけのプロセス

③職業認知と学業成績との関連づけのプロセス

④職業認知の発達的変化

⑤その他の問題（職業認知の情報源、職業認知と個人属性の関連）

4．小学生の職業認知を検討する理由

当初、中高生の職業認知を検討する目的で始まった研究は、５つの新たな課題をもたらした。これら５つの課題に共通点を見出すとすれば、何らかの意味で中高生の職業認知の根幹もしくは基盤となるものが問題となっているという点であろう。つまり、中高生の職業認知について調べ、ある程度、結果が明らかになった後、我々の関心は、「なぜそうした職業認知が形成されるのか」という点に向けられた。

そこで、我々は、若年者の職業認知の形成過程を検討するにあたって、さらに年齢をさかのぼる

ことが１つのアプローチになるのではないかと考えた。中高生の職業認知の不明点は、さらに年齢をさかのぼり、小学生の職業認知を検討することによって明らかになるのではないか。いわば中高生の職業認知の源流へと関心が向けられた。我々が問題にしている若年者の職業意識は何が原因になっているのか。本資料シリーズでは、中高生の職業認知から発展して、何か若年者の職業意識の源流を突き止めることを目的とした。

具体的には、以下に示すように、中高生の職業認知調査とおおむね調査設計をそろえて、対象者を小学生に変えて検討を行う。そして、中高生調査の結果と比較検討するという手法を用いることとした。

５．本研究の方法

調査概要　小学生の職業認知を調べるために、小学生963名に54職業名について「どんな仕事をするのかわからないものはどれですか。」「どんな仕事かしりたいと思いますか。」「大人になったらやってみたいと思いますか。」の３つの設問に対して、当てはまる場合に○をつけるように求めた。

取り上げた職業名　提示した職業名は、「中高生の職業認知」調査で提示された424職業名から以下の手続きで選択した[*1]。まず、中学生１～２年生の「イメージできない率」が50%以下の職業名をリストアップした。職業名はおおよそ産業分類別に12のクラスタに分類されていたので、12クラスタの比率を維持するように、各クラスタから抽出する職業名数を決定した。小学生にとって簡単な職業・やや難しい職業・難しい職業を均等に含むようにするために、各クラスタから「中学生のイメージできない率が最も低い職業」「10%程度がイメージできない職業」「20%程度がイメージできない職業」「30%程度がイメージできない職業」を抽出した。以上のような手続きで抽出された職業名をさらに個別に検討し、調査対象者が小学生であることを考慮して調整を施して、54個の職業名を選択した。

調査票の構成　中高生の職業認知では各職業名について「イメージできない」「知りたい」「やってみたい」の３つの設問によって検討を行った。また、中高生調査では「知りたい」職業であると回答したなかから、「やってみたい」職業を選ぶように教示した。今回、小学生を対象に調査を行うにあたっては、あまり難しい内容にならないように、教示文および手続きを簡素化することとした。すなわち、「イメージできない」の設問を「どんな仕事をするのかわからないものはどれですか」に変更した。さらに、「しりたい」職業から「やってみたい」職業を選ぶという手続きを簡素化し、その職業を知っていてもいなくても「やってみたい」職業を回答してもらうこととした。

以上の変更点から、今回、小学生を対象とした調査では、54職業名について「どんな仕事をするのかわからないものはどれですか」「どんな仕事かしりたいと思いますか」「大人になったらやって

みたいと思っていますか」の３つの設問に対して「はい－いいえ」の２件法で評定を求めることとした。

どの調査票にもフェイスシートがつけられ、学校名、学年、性別、得意科目、職業興味、職業情報源、進路希望、将来何のために働きたいかなどについてあわせて回答を求めた。

調査協力者　調査協力者は小学生963名だった。調査協力者の募集については、東京都、愛知県、滋賀県の小学校７校に個別に連絡をとり、調査協力を依頼した。調査票を発送し、実施後、返送してもらうこととした。

表１　調査回答者の内訳

		性別		合計
		男子	女子	
学年	５年生	229	215	444
		45.6%	46.6%	46.1%
	６年生	273	246	519
		54.4%	53.4%	53.9%
合計		502	461	963
		100	100	100

６．結果の概要

本研究では「わからない」「しりたい」「やってみたい」の３つの設問を多面的に分析することによって、小学生の職業認知の状態を立体的に描き出したいと考えた。分析は、①「わからない」「しりたい」「やってみたい」による職業ランキング、②「わからない」「しりたい」「やってみたい」の性別・学校段階別の違い、③「わからない」「しりたい」「やってみたい」の３指標間の関連、④小学生の職業認知の構造（基本的な判断軸）の４つの観点から行い、最後に以上の分析から明らかになった小学生の職業認知と職業情報開発の関連について考察を行った。

６－１．職業認知指標による小学生の職業ランキング

小学生が「わかる」職業のランキングは、職業の具体的な内容よりも、言葉の難しさや職業名のイメージ、耳なじみのある職業か否かが大きく影響していた。

表2　小学生全体の「わかる」職業ランキング

上位 順位	職業名	%	下位 順位	職業名	%
1	ペットショップ店員	84.63	1	惣菜製造工	34.68
2	漫画家	81.93	2	製薬工	37.69
3	警察官	81.83	3	土木技術者	37.80
4	すし職人	80.37	4	船舶機関士	39.46
5	医師	78.30	5	造園士	39.77
6	小学校教員	76.01	6	哲学者	40.60
7	タクシー運転手	74.87	7	玩具販売員	41.12
8	動物園飼育スタッフ	74.66	8	包装員	43.61
9	和菓子職人	74.14	9	あんまマッサージ指圧師	44.96
10	保育士	73.62	10	着付師	47.25

注1：「わかる」ランキングの%は，100%－「わかならい」と回答した者の%という式によって算出した。
注2：タイトル下に下位と書いてある表の順位は下位ランキングを示す。

小学生が「しりたい」職業の上位には学年別、男女別でそれぞれ違いがみられないのに対して、「しりたい」職業の下位では違いがあることから、小学生の「しりたい」という職業認知に対して性別は消去法的に影響すると考えられる。

表3　小学生全体の「しりたい」職業ランキング

上位 順位	職業名	%	下位 順位	職業名	%
1	アニメーター	37.49	1	ガソリンスタンドサービススタッフ	16.93
2	グラフィックデザイナー	35.51	2	電器店店員	17.86
3	プログラマー	34.37	3	大学・短大・高専学校の教員	17.96
4	ワイン製造工	31.36	4	建築塗装工	18.59
5	弁護士	30.94	5	コーヒースタンド店員	19.00
6	花火師	30.11	6	電気冷蔵庫組立工	19.31
7	警察官	28.87	7	学校事務員	19.42
7	哲学者	28.87	7	鉄道車掌	19.42
9	和菓子職人	28.66	9	生命保険営業員	19.63
10	気象予報士	28.25	10	タクシー運転手	19.73

注1：タイトル下に下位と書いてある表の順位は下位ランキングを示す。

「やってみたい」職業では、女子で上位にランクインしている「ファッションデザイナー」は、小学生の男子の「やってみたい」職業では下位にランクインしているといったように、異性が「やってみたい」と考える職業は「やってみたい」と思わない傾向がみられた。小学生段階から、職業を認知する際に「性別」によって判断するということが示唆される。

ただし、「わかる」「しりたい」「やってみたい」のどの指標でも、特定の職業分野がまとまって上位にランキングされるという結果は見られなかった。また、中高生と違って「わかる」「しりたい」「やってみたい」の各指標を使い分けている様子もほとんど見られず、「やってみたいと思う職業」＝「わかる職業」と認識していた。異性の性別に関係したイメージが強い職業については、

「しりたい」と思わないという結果が示された。

小学生は、職業を体系だって認知するには至っておらず、身近な職業人モデルがいる職業や、マスコミや本などで目にする機会が多い職業、名前の持つイメージが華やかな職業に対して、それぞれと独立に「好き」「嫌い」を判別していたことが読みとれる。むしろ、背後にある職業間の関係を十分に認識してないために、職業名や職業の持つ性別イメージ、あるいは職業名の表記上の難しさなど、外的な基準の影響を大きく受けてしまうと考えられる。

6－2．小学生の職業認知の学年差・男女差

「わかる」職業の男女差については、中学・高校と同様に、一貫して男子に比べて女子の方が「わかる」割合の高い職業の数が多かった。小学生で差が見られた職業のほとんどが中学生でも差が出ており、女子の方が「わかる」職業は学年進行の影響を受けにくく、比較的安定しているといえる。一方、男子の方が「わかる」職業は中学生では差が出ておらず、男子の職業知識量の発達が女子に比べて相対的に遅れていることが示される。

表4　6年生男子の方が5年生男子よりも「わかる」率が高かった職業

5年生	男子	女子			
職業名	わかる率	わかる率	φ係数	有意水準	%の差
ファッションデザイナー	53.3%	88.4%	0.38	***	35.1%
保育士	56.8%	88.4%	0.35	***	31.6%
小学校教員	66.4%	84.7%	0.21	***	18.3%
ペットショップ店員	77.7%	92.6%	0.21	***	14.8%
和菓子職人	64.2%	82.3%	0.20	***	18.1%
着付師	35.8%	54.4%	0.19	***	18.6%
獣医師	59.8%	77.2%	0.19	***	17.4%
通訳者	57.2%	73.5%	0.17	***	16.3%
漫画家	77.7%	89.8%	0.16	**	12.0%
学校事務員	55.9%	70.7%	0.15	**	14.8%
動物園飼育スタッフ	67.2%	80.5%	0.15	**	13.2%
大学・短大・高専学校の教員	55.5%	69.8%	0.15	**	14.3%
理容師	46.3%	60.5%	0.14	**	14.2%
気象予報士	62.0%	74.4%	0.13	*	12.4%
医師	73.4%	84.2%	0.13	*	10.8%
歯科衛生士	48.0%	59.5%	0.12	*	11.5%
包装員	35.4%	46.5%	0.11	*	11.1%
弁護士	62.4%	73.0%	0.11	*	10.6%
コーヒースタンド店員	58.5%	69.3%	0.11	*	10.8%

注　わかる率は、「わからない」と回答した者の人数を、対象人数全体から引くことによって算出し、%は引き算によって算出した人数の%を表記している。

***p<.001　**p<.01　*p<.05

表5　女子6年生の方が男子6年生よりも「わかる」率が高かった職業

6年生	男子	女子			
職業名	わかる率	わかる率	φ係数	有意水準	%の差
ファッションデザイナー	62.3%	84.7%	0.25	***	22.4%
着付師	39.6%	60.3%	0.21	***	20.7%
保育士	67.4%	83.8%	0.19	***	16.4%
ペットショップ店員	78.0%	90.8%	0.17	***	12.8%
動物園飼育スタッフ	69.6%	82.1%	0.14	**	12.5%
通訳者	67.8%	79.9%	0.14	**	12.1%
和菓子職人	69.6%	81.2%	0.13	**	11.6%
漫画家	75.5%	86.0%	0.13	**	10.6%
獣医師	71.4%	81.2%	0.11	*	9.8%
包装員	41.0%	51.5%	0.10	*	10.5%
小学校教員	72.5%	81.2%	0.10	*	8.7%

注　わかる率は、「わからない」と回答した者の人数を、対象人数全体から引くことによって算出し、%は引き算によって算出した人数の%を表記している。
***p<.001　**p<.01　*p<.05

「しりたい」職業の男女差については、中高生では「知りたい」割合に有意差の見られた職業が全体の約半分近くあったのと対照的に、小学生では「しりたい」割合に差が出た職業の数が少ない。また、「わかる」職業と同様に男子優位の職業がほとんどない。差の出た職業の種類も、中学・高校の結果とそれほど共通しておらず、中学・高校で観察されたような明確かつ安定した男女差は、小学校高学年の段階ではみられない。

表6　女子5年生の方が男子5年生よりも「しりたい」率が高かった職業

5年生	男子	女子			
職業名	知りたい率	知りたい率	φ係数	有意水準	%の差
グラフィックデザイナー	28.8%	48.4%	0.20	***	19.6%
包装員	21.8%	36.7%	0.16	**	14.9%
プログラマー	27.5%	41.9%	0.15	**	14.3%
新聞記者	24.0%	37.7%	0.15	**	13.7%
造園士	24.0%	37.7%	0.15	**	13.7%
着付師	24.0%	35.8%	0.13	*	11.8%
和菓子職人	29.3%	40.9%	0.12	*	11.7%
理容師	19.7%	29.8%	0.12	*	10.1%

***p<.001　**p<.01　*p<.05

表7　女子6年生の方が男子6年生よりも「しりたい」率が高かった職業

6年生	男子	女子			
職業名	知りたい率	知りたい率	φ係数	有意水準	%の差
ファッションデザイナー	13.6%	27.1%	0.17	***	13.5%
保育士	12.5%	23.1%	0.14	**	10.7%
漫画家	15.4%	25.3%	0.12	*	9.9%
グラフィックデザイナー	29.3%	39.3%	0.11	*	10.0%
弁護士	23.1%	32.3%	0.10	*	9.2%

***p<.001　**p<.01　*p<.05

「やってみたい」職業の男女差については、前の2指標と比べ、男子優位の職業がかなり多く存在し、女子優位の職業とほぼ同数存在する。これは中学・高校の結果と同様である。差のみられた職業の種類も、男女ともほとんど中高生で差のみられたものと共通し、この指標でみられる結果が安定していることを示す。また、この指標で女子優位の傾向がみられた職業のほとんどが、「わかる」職業でも女子優位の職業であり、少なくとも女子に関しては、「わかる」と「やってみたい」の2指標が相互に関連していると考えられる。

表8　男子6年生の方が女子6年生よりも「やってみたい」率が高かった職業

6年生	男子	女子			
職業名	やってみたい率	やってみたい率	φ係数	有意水準	%の差
自動車組立工	16.1%	2.4%	0.23	***	13.7%
コンピュータ設計技術者	28.2%	10.2%	0.23	***	18.0%
建築大工	23.8%	9.8%	0.19	***	14.1%
自衛官	13.9%	5.3%	0.14	**	8.6%
電器店店員	11.0%	3.7%	0.14	**	7.3%
コメディアン	17.6%	8.5%	0.13	**	9.0%
すし職人	28.9%	17.9%	0.13	**	11.1%
タクシー運転手	14.7%	7.3%	0.12	*	7.3%
船舶機関士	9.9%	4.1%	0.11	*	5.8%
花火師	20.9%	13.4%	0.10	*	7.5%

***p<.001　**p<.01　*p<.05

表9　女子6年生の方が男子6年生よりも「やってみたい」率が高かった職業

6年生	男子	女子			
職業名	やってみたい率	やってみたい率	φ係数	有意水準	%の差
ファッションデザイナー	4.0%	53.3%	0.55	***	49.2%
保育士	10.6%	45.9%	0.40	***	35.3%
理容師	3.3%	29.7%	0.36	***	26.4%
着付師	1.1%	18.3%	0.30	***	17.2%
包装員	1.8%	19.5%	0.29	***	17.7%
通訳者	11.4%	35.8%	0.29	***	24.4%
ペットショップ店員	27.5%	55.7%	0.29	***	28.2%
動物園飼育スタッフ	19.4%	41.5%	0.24	***	22.0%
和菓子職人	17.9%	36.2%	0.21	***	18.2%
漫画家	20.1%	35.0%	0.17	***	14.8%
コーヒースタンド店員	9.2%	19.5%	0.15	**	10.4%
獣医師	22.3%	35.4%	0.14	**	13.0%
小学校教員	11.7%	22.4%	0.14	**	10.6%
新聞記者	11.7%	19.1%	0.10	*	7.4%
医師	21.6%	30.5%	0.10	*	8.9%

***p<.001　**p<.01　*p<.05

「わかる」職業の学年差については、男女とも5年生から6年生にかけて「わかる」割合が減る職業は皆無に近く、中高生でみられた知識の不可逆的上昇傾向がここでも観察された。ただし、「わかる」割合が増えた職業も少なく、1年の学年差ではそれほど大きな変化はなかったと言える。

表10　6年生男子の方が5年生男子よりも「わかる」率が高かった職業

男子	5年生	6年生			
職業名	わかる率	わかる率	φ係数	有意水準	%の差
獣医師	59.8%	71.4%	0.12	*	11.6%
コメディアン	47.6%	59.0%	0.11	*	11.4%
保育士	56.8%	67.4%	0.11	*	10.6%
通訳者	57.2%	67.8%	0.11	*	10.6%
大学・短大・高専学校の教員	55.5%	65.6%	0.10	*	10.1%

注　わかる率は、「わからない」と回答した者の人数を、対象人数全体から引くことによって算出し、%は引き算によって算出した人数の%を表記している。

*p<.05

表11　6年生女子の方が5年生女子よりも「わかる」率が高かった職業

女子	5年生	6年生			
職業名	わかる率	わかる率	φ係数	有意水準	%の差
玩具販売員	31.6%	47.6%	0.16	**	16.0%
コメディアン	48.8%	61.6%	0.13	*	12.7%
土木技術者	30.7%	41.9%	0.12	*	11.2%

注　わかる率は、「わからない」と回答した者の人数を、対象人数全体から引くことによって算出し、%は引き算によって算出した人数の%を表記している。
**p<.01　*p<.05

「しりたい」職業の学年差については、男女とも5年生から6年生にかけて「しりたい」割合の増える職業はない。逆に、減る職業は多く存在し、職業に対する興味が失われていく傾向は、かなりはっきりと存在する。ただし、職業名をみてみると、中高生では、ステレオタイプ的な人気職業に対する興味が減るという傾向が読みとれたが、小学生では、そのような傾向は認められず、他の理由による可能性も考えられる。

表12　5年生男子の方が6年生男子よりも「しりたい」率が高かった職業

男子	5年生	6年生			
職業名	知りたい率	知りたい率	φ係数	有意水準	%の差
漫画家	28.8%	15.4%	0.16	***	13.4%
すし職人	32.3%	19.0%	0.15	**	13.3%
医師	29.7%	17.9%	0.14	**	11.7%
アニメーター	41.5%	30.0%	0.12	*	11.4%
ペットショップ店員	25.8%	16.1%	0.12	*	9.6%
保育士	21.0%	12.5%	0.11	*	8.5%
タクシー運転手	24.5%	15.8%	0.11	*	8.7%
稲作専業農家	23.6%	15.0%	0.11	*	8.6%
玩具販売員	29.7%	20.5%	0.11	*	9.2%
カメラ組立工	27.1%	18.3%	0.10	*	8.8%
電気冷蔵庫組立工	25.3%	16.8%	0.10	*	8.5%
小学校教員	22.7%	14.7%	0.10	*	8.1%
弁護士	32.3%	23.1%	0.10	*	9.2%
建築大工	31.0%	22.0%	0.10	*	9.0%
和菓子職人	29.3%	20.5%	0.10	*	8.7%

***p<.001　**p<.01　*p≦.05

表13　5年生女子の方が6年生女子よりも「しりたい」率が高かった職業

女子	5年生	6年生			
職業名	知りたい率	知りたい率	φ係数	有意水準	%の差
タクシー運転手	26.5%	12.7%	0.18	***	13.8%
包装員	36.7%	21.8%	0.16	**	14.9%
歯科衛生士	30.7%	17.0%	0.16	**	13.7%
ワイン製造工	41.9%	26.6%	0.16	**	15.2%
稲作専業農家	28.4%	15.3%	0.16	**	13.1%
自動車組立工	25.6%	13.1%	0.16	**	12.5%
警察官	39.5%	25.3%	0.15	**	14.2%
和菓子職人	40.9%	26.6%	0.15	**	14.3%
医師	34.9%	21.4%	0.15	**	13.5%
小学校教員	28.8%	17.0%	0.14	**	11.8%
すし職人	29.8%	18.3%	0.13	**	11.4%
鉄道車掌	24.7%	14.4%	0.13	*	10.2%
新聞記者	37.7%	26.2%	0.12	*	11.5%
土木技術者	30.2%	19.7%	0.12	*	10.6%
造園士	37.7%	26.6%	0.12	*	11.0%
コーヒースタンド店員	24.2%	14.8%	0.12	*	9.3%
惣菜製造工	30.7%	20.5%	0.12	*	10.2%
あんまマッサージ指圧師	27.4%	17.9%	0.11	*	9.5%
着付師	35.8%	25.3%	0.11	*	10.5%
学校事務員	25.6%	16.6%	0.11	*	9.0%
花火師	33.0%	23.1%	0.11	*	9.9%
気象予報士	37.2%	27.1%	0.11	*	10.1%

***p<.001　**p<.01　*p<.05

「やってみたい」職業の学年差については、男女とも5年生から6年生にかけて「やってみたい」割合の増減する職業は少ない。1年という接近した期間の学年差を検討したためと考えられるが、「やってみたい」職業が、きわめて安定してることによると考えることもできる。

小学生の職業認知の学年差・男女差は次のようにまとめられる。

①男女差に関しては、「わかる」率・「しりたい」率・「やってみたい」率のいずれにおいても、5年生でみられる傾向と6年生でみられる傾向とは比較的類似しており、「わかる」「しりたい」に関しては女子優位の職業はいくつかあるものの、男子優位の職業はきわめて少ない。

②女子の方が「わかる」職業は美にかかわる職業、教育関係の職業、動物関係の職業が多い。

③「しりたい」率で男女差のみられた職業は、中高生の結果と比べて数が少なく、また、差が出た職業も中学で差が出た職業とあまり重なっていない。

④「やってみたい」率が女子優位の職業は、「わかる」率で女子優位の職業にほぼ重なる。

⑤5年生から6年生にかけて、「わかる」割合が下がる職業は皆無に近く、中高生と同様に「わかる」（イメージできる）力は、不可逆的に上昇していると考えられる。ただし、「わかる」（イメージできる）割合が上がる職業は少ない。

⑥「しりたい」率はかなりはっきりした減少傾向がみられる。ただし、中高生でみられたようなステレオタイプ的な人気のある職業で特に減少するという理由とは違った理由によるものと思われる。

⑦「やってみたい」率は5年から6年にかけてほとんど変化しない。

6－3．小学生の職業認知の得意科目・職業興味との関連

各職業について「わからない」「しりたい」「やってみたい」と回答された割合を、得意科目[*2]および職業興味[*3]の群別で比較し、顕著に差が見られる職業にはどのような特徴があるかを考察した。

得意科目別「わかる」の認知構造　各科目が「得意な」群の方が「得意ではない」群よりも「わかる」割合が大きかった職業は、国語では13職業、算数で7職業、社会で5職業、理科で3職業、音楽で8職業、家庭科で4職業、体育と図工でそれぞれ1職業であった。国語の職業数が多いのは、語彙数が多いためと考えられるが、その他の科目は、科目と関連の深い職業に群差が認められた。

表14　得意科目と「わかる」率に違いがみられた職業名（抜粋）

職業名	得意な群	得意ではない群	差異	χ2値 (df＝1)	有意水準
国語	n＝213	n＝746			
新聞記者	85.4%	70.8%	14.7%	18.55	***
気象予報士	80.3%	67.0%	13.3%	13.86	***
着付師	58.2%	44.0%	14.2%	13.50	***
稲作専業農家	63.4%	49.2%	14.2%	13.36	***
小学校教員	85.4%	73.5%	12.0%	13.10	***
医師	86.9%	75.9%	11.0%	11.77	**
包装員	53.5%	40.6%	12.9%	11.23	**
通訳者	78.4%	67.3%	11.1%	9.70	**
玩具販売員	49.8%	38.5%	11.3%	8.74	**
建築大工	75.6%	65.0%	10.6%	8.43	**
和菓子職人	81.7%	72.0%	9.7%	8.14	**
惣菜製造工	42.7%	32.3%	10.4%	7.94	**
哲学者	48.4%	38.3%	10.0%	6.90	*

***p<.0001　**p<.001　**p<.005

得意科目別「しりたい」の認知構造　小学生の「しりたい」という動機づけと得意科目との明らかな関連は認められなかった。どの群も「しりたい」率は10%～30%台がほとんどであり、相対的に低かった。小学生の段階では、まだ限られた経験と知識のために、たくさんの職業を構造化し、ある職業群を固まりとして「しりたい」と認知する段階までは発達していないのかもしれない。小学5、6年生では、学校での各科目の成績によって、職業を「しりたい」程度に明確な差がみられないということが示唆される。

得意科目別「やってみたい」の認知構造　「わかる」「しりたい」「やってみたい」の3指標のうち、各科目が得意か否か（成績）による差が顕著に認められたのは、「やってみたい」である。「やってみたい」という認知と得意科目との関連を概観すると、大きく2つの特徴があると考えられる。

まず、大部分の職業で「得意な」群のほうが「やってみたい」率が高い点である。

次に、得意群と得意ではない群に差が見られた職業名は、気象予報士、コンピュータ設計技術者など主要4科目で共通するものが多い点である。また、音楽・家庭科・図工についても「得意な」群と「得意ではない」群の間に差がみられた職業はファッションデザイナー・グラフィックデザイナーなどファッションや芸術に関する職業、保育士・ペットショップ店員など子供や動物に関わる職業、和菓子職人など食品に関わる職業など共通している。各教科の「得意な」群と「得意ではない」群の分布に男女比の偏りがあることは考慮しなければならないが、小学5、6年生では、得意科目と「やってみたい」職業を関連づけており、逆に自分が得意ではない科目に関連する職業については「やってみたい」と認知しないということが伺える結果となった。

表15　得意科目と「やってみたい」率に違いがみられた職業名一抜粋

職業名	得意な群	得意ではない群	差異	χ2値 (df＝1)	有意水準
図工	n＝362	n＝597			
漫画家	44.8%	22.4%	22.3%	52.55	***
和菓子職人	37.3%	21.6%	15.7%	27.79	***
ファッションデザイナー	36.7%	24.1%	12.6%	17.47	***
アニメーター	38.7%	26.1%	12.5%	16.62	***
獣医師	34.5%	24.0%	10.6%	12.52	***
すし職人	29.3%	20.9%	8.3%	8.58	**
保育士	34.3%	25.8%	8.5%	7.83	*
グラフィックデザイナー	31.2%	23.1%	8.1%	7.65	*
新聞記者	21.3%	14.4%	6.9%	7.53	*
ペットショップ店員	47.8%	38.9%	8.9%	7.36	*
ワイン製造工	13.0%	7.7%	5.3%	7.17	*
建築大工	19.3%	13.1%	6.3%	6.79	*
着付師	13.3%	8.2%	5.1%	6.33	*
音楽	n＝349	n＝610			
ファッションデザイナー	46.1%	18.7%	27.4%	81.74	***
保育士	45.0%	19.7%	25.3%	69.25	***
通訳者	38.1%	14.8%	23.4%	67.85	***
着付師	18.3%	5.6%	12.8%	39.42	***
小学校教員	28.1%	13.3%	14.8%	32.04	***
理容師	22.6%	9.7%	13.0%	30.29	***
動物園飼育スタッフ	39.3%	23.6%	15.6%	26.24	***
獣医師	37.2%	22.3%	15.0%	24.77	***
コーヒースタンド店員	20.1%	10.2%	9.9%	18.31	***
漫画家	39.0%	26.1%	12.9%	17.35	***
アニメーター	39.0%	26.2%	12.7%	16.88	***
和菓子職人	35.0%	23.1%	11.8%	15.64	***
ペットショップ店員	49.9%	37.7%	12.2%	13.45	***
大学・短大・高専教員	13.5%	6.6%	6.9%	12.85	***
グラフィックデザイナー	32.7%	22.6%	10.0%	11.56	**
稲作専業農家	9.2%	3.9%	5.2%	11.06	**
包装員	13.5%	7.5%	5.9%	8.90	**
学校事務員	10.3%	5.4%	4.9%	8.00	**
気象予報士	22.9%	15.9%	7.0%	7.27	*
医師	29.5%	22.0%	7.5%	6.79	*

***p<.0001　**p<.001　**p<.005

職業興味別「わかる」の認知構造　職業名が「わかる」率に差のみられたものの94%で、「したい」群のほうがその他の2群よりも「わかる」率が高いという結果から、そのほとんどが「したい←どちらでもない←したくない」の順に単純増加している（興味があるほどわかる）ことが示された。

表16　興味と「わかる」率に違いがみられた職業名（抜粋）

ものを考えたり調べる仕事	したい群	どちらでもない群	したくない群	χ２値（df＝２）	有意水準
	n＝193	n＝397	n＝361		
哲学者	59.6%	38.5%	33.0%	38.24	***
コンピュータ設計技術者	73.1%	49.6%	55.7%	29.28	***
グラフィックデザイナー	67.9%	49.6%	46.8%	24.26	***
薬剤師	70.5%	54.4%	49.6%	22.80	***
ワイン製造工	69.4%	54.4%	49.3%	20.96	***
花火師	75.6%	63.7%	57.1%	18.77	***
裁判所書記官	66.8%	48.6%	51.0%	18.50	***
稲作専業農家	65.3%	51.4%	46.3%	18.45	***
医療事務員	60.6%	45.6%	42.7%	17.30	***
製薬工	50.3%	33.2%	35.5%	17.10	***
土木技術員	50.3%	35.5%	33.2%	16.83	***
船舶機関士	51.3%	38.8%	33.8%	16.24	***
建築技術者	68.4%	53.1%	51.5%	16.19	***
自衛官	60.1%	44.8%	46.3%	13.26	**
惣菜製造工	45.6%	31.7%	31.6%	13.22	**
地震学者	63.2%	50.6%	47.4%	13.12	**
あんまマッサージ指圧師	56.5%	41.1%	43.5%	13.09	**
大学・短大・高専教員	75.1%	64.5%	59.8%	12.96	**
歯科衛生士	64.2%	50.9%	49.0%	12.79	**
鉄道車掌	65.8%	51.9%	51.2%	12.57	**
玩具販売員	51.3%	40.3%	36.3%	11.85	**
包装員	53.9%	42.3%	39.6%	10.90	**
理容師	65.3%	55.4%	50.7%	10.86	**
建築大工	76.7%	66.8%	63.7%	9.90	*
通訳者	78.2%	69.3%	65.4%	9.88	*
造園士	48.7%	39.3%	35.5%	9.27	*
生命保険営業員	61.1%	50.1%	48.2%	9.05	*
獣医師	79.3%	73.3%	68.1%	8.01	*

***p<.0001　**p<.001　**p<.005

職業興味別「しりたい」の認知構造　職業興味と「しりたい」の関係はあまり見られず、関連がある場合も解釈が容易でないものが多かった小学５、６年生の段階では、たくさんの職業を構造化し、ある職業群を固まりとして「しりたい」と認知する段階までは発達していない可能性が考えられる。職業認知の発達として「興味（ある領域の仕事がしたい）→しりたい」という方向性が仮定できるが、小学５、６年生では生活経験や知識体系が限定されているために「やってみたい」や興味にとどまっている可能性が示された。

表17　興味と「しりたい」率に違いがみられた職業名（抜粋）

計算したり書類を作成する仕事	したい群	どちらでもない群	したくない群	χ２値 (df＝２)	有意水準
	n＝106	n＝305	n＝540		
薬剤師	33.0%	26.2%	18.52%	14.01	**
医療事務員	28.3%	24.9%	16.85%	11.90	**
生命保険営業員	25.5%	23.9%	16.30%	9.62	*
新聞記者	17.0%	33.1%	24.81%	12.53	**
学校事務員	17.9%	25.2%	16.67%	9.32	*
絵や音楽の仕事	**したい群**	**どちらでもない群**	**したくない群**	**χ２値 (df＝２)**	**有意水準**
	n＝366	n＝306	n＝281		
通訳者	68.3%	27.8%	18.1%	196.23	***
ファッションデザイナー	27.0%	20.6%	13.9%	16.64	***
気象予報士	33.1%	29.4%	21.4%	10.92	**
プログラマー	37.4%	38.2%	26.7%	10.86	**
グラフィックデザイナー	39.6%	38.2%	27.8%	11.03	**
言葉や数字を使う仕事	**したい群**	**どちらでもない群**	**したくない群**	**χ２値 (df＝２)**	**有意水準**
	n＝118	n＝415	n＝411		
薬剤師	29.7%	25.3%	17.8%	10.61	**
弁護士	33.9%	37.3%	24.6%	16.06	***
警察官	29.7%	34.2%	23.6%	11.32	**
新聞記者	28.0%	31.1%	21.7%	9.54	*
学校事務員	18.6%	24.3%	15.1%	11.30	**
大学・短大・高専学校の教員	15.3%	23.4%	13.6%	13.97	**
獣医師	23.7%	30.8%	20.9%	10.91	**

***p<.0001　**p<.001　**p<.005

職業興味別「やってみたい」の認知構造　職業興味と「やってみたい」職業の関連は明確であるものが多い。例えばものを組み立てたり作ったりする仕事では建築大工、自動車組立工を「やってみたい」など、「やってみたい」指標を用いてみると、小学５、６年生の職業分類能力は非常に正確で優れている領域があることが分かる。しかし、「やってみたい」率が高い職業と興味領域との関連が単純ではない領域もあり、小学５、６年生独自の世界で職業をまとめている可能性が残った。

表18　興味と「やってみたい」率に違いがみられた職業名（抜粋）

ものを組み立てたり作ったりする仕事	したい群	どちらでもない群	したくない群	χ２値 (df＝２)	有意水準
	n＝356	n＝359	n＝243		
建築大工	29.2%	7.8%	6.6%	82.34	***
自動車組立工	21.6%	6.1%	6.2%	51.15	***
すし職人	35.7%	16.7%	18.1%	41.54	***
カメラ組立工	13.2%	5.0%	2.5%	29.05	***
グラフィックデザイナー	35.4%	22.8%	18.1%	25.81	***
花火師	23.3%	12.0%	9.9%	25.64	***
建築塗装工	9.3%	2.5%	1.6%	24.98	***
コンピュータ設計技術者	26.1%	12.8%	14.4%	24.40	***
電気冷蔵庫組立工	10.1%	3.3%	2.1%	23.20	***
アニメーター	40.2%	25.9%	24.7%	22.91	***
電気店店員	12.6%	4.7%	4.1%	21.49	***
建築技術者	16.0%	8.1%	5.8%	19.65	***
船舶機関士	9.8%	4.5%	2.1%	17.87	***
プログラマー	21.6%	12.5%	10.7%	16.94	***
漫画家	38.5%	28.4%	23.5%	16.93	***
土木技術者	7.9%	2.2%	2.5%	16.40	***
タクシー運転手	16.6%	8.4%	8.6%	14.46	**
和菓子職人	34.0%	26.2%	20.2%	14.37	**
警察官	35.4%	25.9%	23.0%	12.96	**
惣菜製造工	4.2%	2.2%	0.0%	11.02	**
鉄道車掌	12.4%	7.8%	5.3%	9.59	*
玩具販売員	11.0%	7.0%	4.5%	8.87	*
通訳者	15.4%	25.6%	23.0%	11.76	**
着付師	9.6%	13.6%	5.8%	10.11	*
保育士	21.6%	33.1%	33.3%	14.63	**

***p<.0001　**p<.001　**p<.005

６－４．小学生の職業認知の情報媒体・働く目的との関連

子どもたちが普段どこから職業に関する情報を得ているのかを検討するために、①テレビ、②本、③雑誌、④学校、⑤友達、⑥先輩、⑦先生、⑧親の８つの情報媒体を提示し、情報を得ている頻度別に各職業認知指標との関連を検討した。

その結果、まず情報媒体と「わかる」率との関連については、「わかる」率が全体的に高い職業において、差が見られた。テレビ・雑誌などの情報媒体については、ファッション関連の職業が取り上げられることが多いことが影響しているのか、「わかる」率に有意差が見られる職業に「ファッション関係」の職業がいくつか挙げられていた。

表19　情報媒体別「わかる」率に差が見られた職業（抜粋）

①テレビから仕事について知ることが	よくある	ときどきある	ほとんどない	χ2	有意水準
獣医師	76.47%	67.80%	63.49%	10.77	**
ペットショップ店員	87.87%	81.07%	77.78%	10.14	*
小学校教員	77.76%	76.27%	60.32%	9.45	*
すし職人	82.54%	79.38%	66.67%	9.32	*
タクシー運転手	77.94%	72.88%	61.90%	9.13	*
鉄道車掌	56.43%	53.95%	38.10%	7.68	*
③雑誌から仕事について知ることが	よくある	ときどきある	ほとんどない	χ2	有意水準
グラフィックデザイナー	60.30%	54.13%	45.79%	12.05	**
理容師	60.80%	58.93%	49.21%	10.14	*
ファッションデザイナー	76.38%	74.93%	66.32%	9.53	*
玩具販売員	49.25%	40.80%	36.32%	9.04	*
歯科衛生士	57.29%	56.00%	46.84%	8.54	*
着付師	51.26%	50.13%	41.58%	7.41	*

また、「しりたい」率との関係については、全体に「しりたい」率は低いものの、学校から情報を得ることが多い者は、授業で取り上げられやすい職業について「しりたい」率が高くなり、また親から情報をよく得ている者は、ほとんど得ていない者に比べ、多くの職業について「しりたい」と思う割合が高かった。

表20　情報媒体別「しりたい」率に差が見られた職業（抜粋）

①テレビから仕事について知ることが	よくある	ときどきある	ほとんどない	χ2	有意水準
小学校教員	23.90%	15.25%	14.29%	11.39	**
薬剤師	25.18%	19.77%	11.11%	8.47	*
医療事務員	23.53%	16.95%	12.70%	8.18	*
包装員	28.49%	22.88%	14.29%	8.01	*
④学校から仕事について知ることが	よくある	ときどきある	ほとんどない	χ2	有意水準
警察官	35.47%	27.85%	19.32%	14.99	**
小学校教員	24.46%	19.52%	13.64%	8.55	*
気象予報士	33.64%	26.10%	23.86%	7.40	*

さらに「やってみたい」率との関連では本や先生・親から情報を得ることが多い者は、子どもたちにあまりなじみのない職業に対しても、ほとんど情報を得ることがない者に比べ「やってみたい」と感ていることが明らかになった。

表21　情報媒体別「やってみたい」率に差が見られた職業（抜粋）

②本から仕事について知ることが	よくある	ときどきある	ほとんどない	χ2	有意水準
医師	34.33%	23.46%	17.71%	20.71	***
通訳者	29.10%	18.96%	16.97%	14.18	**
グラフィックデザイナー	33.21%	25.36%	20.30%	11.87	**
動物園飼育スタッフ	35.82%	28.91%	22.88%	10.95	**
和菓子職人	34.70%	25.83%	22.88%	10.47	*
建築技術者	15.30%	8.53%	8.49%	9.54	*
アニメーター	37.69%	28.44%	27.68%	8.31	*
哲学者	10.82%	7.11%	4.43%	8.13	*
新聞記者	21.27%	17.30%	12.18%	7.97	*
獣医師	33.96%	26.78%	23.62%	7.62	*
④学校から仕事について知ることが	よくある	ときどきある	ほとんどない	χ2	有意水準
ペットショップ店員	52.60%	36.84%	36.36%	22.33	***
稲作専業農家	9.79%	4.17%	2.84%	14.46	**
大学・短大・高専学校の教員	12.84%	8.55%	3.98%	11.20	**
小学校教員	22.94%	18.64%	10.80%	11.11	**
動物園飼育スタッフ	35.47%	26.97%	22.73%	10.90	**
保育士	33.33%	29.17%	19.89%	10.11	*
学校事務員	10.09%	6.58%	2.84%	9.48	*

しかし、いずれの指標に関しても特定の情報媒体から情報を得ていると職業認知が進むといった明確な結果は見られず、また「わかる」「しりたい」「やってみたい」という各指標と直接関係するような結果は見いだせなかった。

また、働く目的との関連では、①生活するお金を稼ぐため（生計をたてるため）、②やりたい仕事をするため、③人のため、④お金をもうけるためという４つの働く目的を提示し、それぞれに対する考え方によって、職業認知指標に対する回答率に差が見られるかどうか検討した。

まず、「わかる」率に関しては、「やりたい仕事のため」に働きたいと回答している者ほど「わかる」率が高い職業が20職業もみられたものの、特定の領域の職業名が多く見られるなどの明確な特徴は示されなかった。ただし、「しりたい」率については、「人のため」に働くと回答した者の方が、全体的に「しりたい」率は低いものの「警察官」「教員」など社会性の高い職業を「しりたい」と考えていることが明らかになった。

表22　働く目的別「しりたい」率に差が見られた職業

③人のため	はい	どちらでもない	いいえ	χ2	有意水準
哲学者	33.33%	23.10%	18.18%	13.91	**
新聞記者	30.76%	20.76%	18.18%	12.82	**
弁護士	35.17%	27.19%	16.36%	12.20	**
大学・短大・高専学校の教員	20.44%	15.79%	3.64%	11.09	**
薬剤師	25.97%	17.84%	12.73%	11.08	**
小学校教員	23.94%	15.50%	14.55%	10.44	*
和菓子職人	32.23%	25.44%	16.36%	9.14	*
医療事務員	23.57%	15.79%	14.55%	9.05	*
漫画家	27.07%	21.64%	12.73%	7.60	*

小学生の段階では、そもそも自分の将来就く仕事を選ぶという意識がまだ十分形成されておらず、情報媒体や働く目的によって職業認知の指標に変化が見られることはほとんどなかった。しかし、直接的ではないにせよ、職業に対する関心を高めたり、職業世界に対する視野を広げたりするには、より早い段階から職業情報を子どもたちに適切に提供し、働きかけることが大切であると言えよう。

6－5．小学生の職業認知の指標間の関連

小学生の職業認知の相関係数を求めた結果、「わからない」率と「しりたい」率の相関は.125とほぼ無相関であったが、「しりたい」率と「やってみたい」率では.300となった。「しりたい」と評定する子が多いほど「やってみたい」も多いという傾向が見られた。さらに「わからない」率と「やってみたい」率では－.764と高い負の値となり、わからない職業に対して「やってみたい」と思わない傾向が明瞭に見られた。

ただし、「わからない」率と「しりたい」率または「しりたい」率と「やってみたい」率の組み合わせにおいては、被験者の属性や成績などに着目して比較してみると、相関係数の値がかなり異なるという結果が見られた。まず「わからない」率と「しりたい」率では、6年生、学業成績が良くない児童、「早く大人になって仕事をしたい」と考えている児童において、両指標は小さくない正の相関を示した。

表23　「どんな仕事かわからない」と「知りたい」の該当率の相関

性別	男子（502）	0.070
	女子（461）	−0.012
学年	5年生（444）	−0.015
	6年生（519）	0.225
4教科の成績	ひとつも不得意がない（404）	−0.231
	ひとつ以上不得意がある（559）	0.367
	（ひとつも得意がない（335））	0.477
算数が得意か	得意（265）	−0.280
	ふつう（437）	0.039
	不得意（257）	0.509
早く大人になって仕事がしたいか	はい（516）	0.233
	いいえ（409）	−0.061

※カッコ内の数字は各群の人数

次に「しりたい」率と「やってみたい」率では、男子、5年生、成績の良い子、「早く大人になって仕事をしてみたい」とは思っていない児童において、より大きい値の正の相関係数が得られた。すなわち、しりたい子が多い職業ほど、やってみたい子が多い傾向である。性別を除いて、表1－23とは逆の結果であるが、これは「わからない」と「やってみたい」がかなり高い負の相関を示すためであると解釈できる。

表24　「どんな仕事かしりたい」と「やってみたい」の該当率の相関

性別	男子（502）	0.478
	女子（461）	0.330
学年	5年生（444）	0.325
	6年生（519）	0.271
4教科の成績	ひとつも不得意がない（404）	0.358
	ひとつ以上不得意がある（559）	0.198
	（ひとつも得意がない（335））	0.101
算数が得意か	得意（265）	0.415
	ふつう（437）	0.301
	不得意（257）	0.124
早く大人になって仕事がしたいか	はい（516）	0.186
	いいえ（409）	0.430

※カッコ内の数字は各群の人数。

続いて、一方の指標に○をつけた子とつけていない子で、他方の指標に○をつけた率を比較することで、両指標が比較的強く関連する職業とそうでない職業の特徴を検討した。いずれの組み合わせにおいても、ほとんどすべての職業において、差異は同じ符号となった。すなわち、「どんな仕事かわからない」に○をつけなかった子の方がつけた子よりも「しりたい」と回答し、「しりたい」に○をつけなかった子の方がつけた子よりも「やってみたい」と答え、「どんな仕事かわからない」

に○をつけなかった子の方がつけた子よりも多く「やってみたい」に○をつけた。関連の強い職業と弱い職業の差異は、いずれの指標の組み合わせにおいても、「地味な印象を受けやすい職業か、華やかな印象の職業か」という性質によって生じていた。しかし、「わからない」と「しりたい」についての分析を、同じ職業について中学・高校生を対象に行なってみると、人気のある職業が表の下位から上位に逆転するなど、かなり様相が異なった。興味深い結果が見られた。

表25　「どんな仕事かわからない」と「しりたい」の関連が特徴的な職業（抜粋）

		わからない人の「知りたい」率	わかる人の「知りたい」率	「知りたい」率の差	ファイ係数	カイ2乗検定	
男子	タクシー運転手	4.8	24.6	19.8	−0.21	23.04	**
	小学校教員	5.9	23.7	17.8	−0.21	22.42	**
	着付師	16.7	31.6	14.9	−0.17	15.15	**
	漫画家	10.2	25.0	14.8	−0.15	11.76	**
	ガソリンスタンドサービススタッフ	10.5	24.6	14.1	−0.17	14.67	**
	新聞記者	12.3	26.1	13.8	−0.15	11.44	**
	気象予報士	15.9	29.5	13.6	−0.15	11.18	**
	医師	13.3	26.4	13.1	−0.13	8.78	**
	すし職人	15.5	27.4	11.9	−0.11	5.94	*
	大学・短大・高専学校の教員	8.2	19.9	11.8	−0.16	12.75	**
女子	建築技術者	12.5	30.0	17.5	−0.21	20.38	**
	気象予報士	21.0	35.7	14.7	−0.14	8.74	**
	タクシー運転手	9.3	23.3	14.0	−0.15	10.86	**
	自動車組立工	9.1	23.0	13.9	−0.17	12.50	**
	漫画家	16.1	29.4	13.3	−0.10	4.35	*
	建築大工	14.5	26.8	12.3	−0.14	9.30	**
	鉄道車掌	12.4	24.6	12.1	−0.16	11.07	**
	花火師	20.2	31.8	11.6	−0.13	7.37	**
	電器店店員	8.9	20.3	11.4	−0.14	9.34	**
	造園士	26.6	37.9	11.3	−0.12	6.67	**

6－6．小学生の職業認知の構造

小学生の職業認知の構造を分析するために、小学生がどのような職業を類似した職業と認識しているかを検討した。「やってみたい」職業に対する回答に主成分分析を行った結果、同じグループの職業名は、職務内容の類似性、産業分野の類似性、働く場所の類似性などいくつかの類似性に基づいていることが分かった。小学生はいろいろな側面から職業名間に何らかの類似性を感じ取り、それぞれをまとまった職業として認知していた。

表26　「やってみたい」の主成分分析（抜粋）

	1	2	3	4	5	6	7
ファッションデザイナー	.739	−.091	.089	.072	.022	.077	.012
保育士	.635	.060	−.048	.066	−.079	.179	−.048
理容師	.618	−.011	.199	−.015	.037	.050	.138
着付師	.585	.010	.035	.051	.000	.014	−.069
電気冷蔵庫組立工	−.011	.786	.091	.007	.077	.057	.091
カメラ組立工	.054	.769	.031	.106	.097	.013	.111
自動車組立工	−.170	.507	.015	.106	.226	.074	.178
電器店店員	−.035	.407	.196	.041	.042	.082	.227
薬剤師	.087	−.023	.714	.093	.181	−.037	.025
医師	.027	−.010	.506	.406	.061	.181	.138
歯科衛生士	.111	.140	.590	.032	.037	.308	.100
医療事務員	.093	.184	.415	.158	.141	.232	.048
警察官	.092	.040	.007	.698	.044	−.032	.145
弁護士	.016	.070	.195	.663	.108	.241	−.012
裁判所書記官	.097	.134	.239	.578	.195	.170	.061
自衛官	−.040	−.014	−.086	.493	.237	−.033	.110
プログラマー	.023	.097	.174	.171	.648	−.008	.124
コンピュータ設計技術者	−.112	.177	.138	.143	.640	.105	.114
グラフィックデザイナー	.177	.047	.072	.092	.589	.002	.120
哲学者	−.148	.014	.195	.314	.460	.102	−.017
小学校教員	.132	.007	.031	.124	.066	.716	−.064
大学・短大・高専学校の教員	.100	.002	.313	.081	.035	.653	.065
学校事務員	.104	.124	.048	.136	.036	.622	.090
建築大工	−.112	−.013	−.049	.153	.011	.049	.729
建築技術者	.090	.152	.179	.115	.238	.049	.694
建築塗装工	.036	.292	.074	−.001	.028	.049	.527
土木技術者	.041	.173	.040	.004	.084	−.062	.505
分散	2.678	2.418	2.404	2.392	2.376	2.162	2.104
説明率	5.0%	4.5%	4.5%	4.4%	4.4%	4.0%	3.9%

各主成分の特徴を明らかにするために、様々な要因で各主成分得点を比較した結果、性別で大きな違いがみられた。

表27　性別の主成分得点の平均値・SD

	男子(N＝502)		女子(N＝461)		
	平均値	SD	平均値	SD	
ファッションデザイナー・保育士他	−0.56	0.55	0.61	1.02	**
電気冷蔵庫組立工・カメラ組立工他	0.13	1.17	−0.14	0.76	**
薬剤師・医師他	−0.03	0.97	0.03	1.03	
警察官・弁護士他	0.04	1.05	−0.04	0.94	
プログラマー・コンピュータ設計技術者他	0.12	1.12	−0.13	0.84	**
小学校教員・大学短大高専学校の教員他	−0.06	0.89	0.07	1.10	*
建築大工・建築技術者他	0.16	1.13	−0.17	0.81	**
ワイン製造工・惣菜製造工他	−0.05	0.91	0.06	1.09	
ペットショップ店員・動物園飼育スタッフ他	−0.21	0.91	0.23	1.04	**
漫画家・アニメーター他	−0.05	0.97	0.06	1.03	
稲作専業農家・鉄道車掌他	0.04	0.97	−0.04	1.03	
コーヒースタンド店員・ガソリンスタンドサービススタッフ他	0.07	0.95	−0.08	1.05	*
あんまマッサージ指圧師・船舶機関士他	0.10	1.02	−0.11	0.97	**
タクシー運転手・玩具販売員他	0.11	1.08	−0.12	0.89	**

男子と女性で、やってみたいと考える職業グループに違いがみられた以外に、学校における得意科目との関連もみられた。

表28　得意科目と主成分得点の関連

	国語	算数	社会	理科	4教科合計	体育	図工	音楽	家庭科
ファッションデザイナー・保育士他	.21	−.13	−.08	−.15	−.08	−.12	.09	.31	.26
電気冷蔵庫組立工・カメラ組立工他	−.10	−.06	−.04	−.06	−.10	−.04	−.08	−.08	−.04
薬剤師・医師他	.05	.14	.13	.08	.16	−.03	−.03	.00	−.03
警察官・弁護士他	.04	.08	.06	.02	.09	.09	.01	.03	.04
プログラマー・コンピュータ設計技術者他	.08	.08	.03	.15	.13	−.05	.01	.01	−.01
小学校教員・大学短大高専学校の教員他	.10	.12	.03	.01	.11	.05	.00	.05	.02
建築大工・建築技術者他	−.05	.01	−.03	.00	−.03	.11	.05	−.05	−.01
ワイン製造工・惣菜製造工他	−.02	.02	.00	.05	.02	−.03	.02	−.05	.06
ペットショップ店員・動物園飼育スタッフ他	−.01	−.14	−.08	.03	−.09	.03	.05	.10	.08
漫画家・アニメーター他	.06	−.05	.03	.04	.02	−.04	.22	.11	.09
稲作専業農家・鉄道車掌他	−.04	−.01	.01	.02	−.01	.00	−.06	.00	−.06
コーヒースタンド店員・ガソリンスタンドサービススタッフ他	−.05	−.11	−.04	.01	−.08	.05	.06	−.03	.02
あんまマッサージ指圧師・船舶機関士他	−.05	−.04	−.01	−.03	−.04	.06	−.01	−.08	−.05
タクシー運転手・玩具販売員他	−.03	.03	−.04	−.04	−.03	−.05	−.06	−.01	−.05

※太字は5％水準で有意な相関係数

その他の様々な要因を調整して、各主成分を規定する要因を明らかにするために、重回帰分析を行って要因分析を行った。その結果、「性別」「学業成績」「職業興味」の寄与が大きかった。

表29　各主成分得点を規定する要因（抜粋）

ファッションデザイナー・保育士他		
	β	sig.
性別（男子＝1，女子＝2）	.50	**
絵や音楽の仕事がしたい	.08	**
国語が得意	.08	**
生活に必要なお金をもらうために働きたい	.07	*
家庭科が得意	.07	*
いろいろな人と接する仕事がしたい	.06	*
電気冷蔵庫組立工・カメラ組立工他		
	β	sig.
機械や道具をいろいろ使う仕事がしたい	.13	**
学年	−.13	**
絵や音楽の仕事がしたい	−.12	**
親と話をしている時に知る	−.09	**
体育が得意	−.08	*
先生と話している時に知る	.07	*
早く大人になって仕事がしたい	.06	+

6－7．小学校教員のインタビューからみた小学生の職業意識

日常的に小学生と長い時間を過ごす小学校教員のインタビューの結果、以下の諸点が明らかになった。

①直接、目にする職業は、小学生の進路意識に大きな影響を与えるが、マスメディアの影響は限定的である。テレビで取り上げられた職業のどこに着目し、どのような情報を取り込むかは、親の影響が大きい。

②親の職業は子供には見えなくなっているため、直接は小学生の進路意識に大きな影響を与えない。むしろ親の職業は、親の職業観、労働観を通じて子供に伝えられ、その影響を子供は大きく受けていると推測される。

③小学生の職業意識の発達は、認知発達のレベルと対応しており、どの程度、抽象的な思考が可能であるかに影響を受ける。抽象的な思考が可能とならなければ、自他の特徴や職業などの抽象概念の理解が難しい。発達のプロセスは、目に見える思考対象である他者の理解から、より抽象的な自己の理解へと進むと推測される。

④小学生の進路意識形成の取り組みは、社会科や生活科、総合的学習などでなされていると言えるが、むしろより多面的な学習効果が期待されている。概して具体的な職業や進路に対する指導よりはむしろ基礎的な学力や生き方の指導などが目標とされている。基礎学力がつく前に職業や進路の指導は難しく、自己理解も「好きなもの」を中心とした指導となっている。

6－8．小学生の職業認知と職業発達

進路ガイダンスの効果をあげるためには、職業発達の段階に応じた実践プログラムが求められている。実践の経験を踏まえた進路指導のガイドラインが必要であり、大所高所の議論に基づいた原理・原則だけでは進路指導は促進しない。小学生の調査、中高生の調査をもとに考えられる職業発達のガイドラインとして、以下のようなものが想定される。

小学生では職業認知の発生と拡大が中心となる。職業というよりもむしろ社会の重要な活動や親の仕事に気づくことがである。中学生では、職業認知の増大が進むが、その一方で限定が起きる。イメージできる職業の数量や知識が増える一方、早い段階から認知する職業を限定する。高校生では、職業認知はやがて飽和に至る。その後、職業認知の体系化と特定化が起きる。体系化とは、ある基準や視点から職業を整理できることである。一方、特定化とは、多くの認知した職業からそれらを少数に絞り込むことである。こうした大枠の進路指導の流れには、進路の価値モデル（職業観）が密接に関連していると考えられる。進学モデル、興味重視モデル、就職モデルなどいくつかのモデルが考えられる。

〈参考文献〉

石井徹　2001　職業認知と職業情報開発　日本労働研究機構編「資料シリーズ No.112　中学生・高校生の職業認知」　日本労働研究機構.

宮崎利行　1973　職業知識の構造に関する一考察　職業研究所「研究紀要」，5，1-15.

日本労働研究機構　2001　中学生・高校生の職業認知　資料シリーズ No.112　日本労働研究機構.

日本労働研究機構　2002　職業ハンドブック OHBY 利用ガイド　日本労働研究機構.

*1　「中高生の職業認知」調査で提示された424職業名のうち282個は「職業ハンドブック CD-ROM 検索システム Ver.1.1」に掲載されている職業名であり、残りの142職業名は、2000年３月時点で製作中の「中高生版職業ハンドブック（仮）」に掲載を検討中の職業名だった。

*2　小学校で児童が学ぶ８科目について「得意」「普通」「不得意」の３件法で尋ね、３群に分けた。しかし、各群の職業名が「わからない」「しりたい」「やってみたい」率を算出した結果、「普通」群と「不得意」群の３つの率の傾向が類似していたため、この２群を合わせて「得意ではない」群とし、以下の分析をおこなった。

*3　８領域の職業に対する興味の程度による群分け（「したい」群・「どちらでもない」群・「したくない」群）をした。以下の分析では、３群間の各職業を「わかる」「しりたい」「やってみたい」率を算出し比較した

資料シリーズ No. 138
小学生の職業意識とキャリアガイダンス
（概要）

発行年月日　２００３年９月３０日
発　　行　日本労働研究機構©
〒 177-8502
東京都練馬区上石神井4-8-23
URL　http://www.jil.go.jp/
＊本誌は資料シリーズ No. 138の概要です。
資料シリーズ本体のお問い合わせ先
編集　（企画課）　Tel.　03-5991-5103

THE JAPAN INSTITUTE OF LABOUR